

[書評]

塩川伸明 著『国家の解体 ペレストロイカと ソ連の最期 I, II, III』*

木村 崇

はじめに

本著書は、本文2265頁、索引、文献一覧等72頁からなる全体で2300頁を超える大部の歴史書である。一方取り扱われている期間は、1985年から1991年末までの7年弱に過ぎず、この間の歴史経過がいかに凝縮していたかと、感慨を新たにせざるをえない。著者塩川伸明は「最終的にソ連国家の解体に行き着いたペレストロイカの過程を、連邦制および民族問題に力点を置きながら解明しようと試みるものである」(2頁)と述べ、対象となる時空間を網羅的に照射するものではないことを、あらかじめ断っている。その理由について、「ペレストロイカの過程を全体として総合的に解明するためには、本来なら政治・経済・社会・文化・民族問題・外交等々のすべての側面を考察しなくてはならないが、一つの研究でそれら全体を取り上げるわけにはいかないことから、とりあえず重点を国家の解体およびそれと密接不可分である民族の問題に絞るとというのが、本書の課題設定である」(3頁)と述べ、研究対象と範囲を絞り込んであることをまえもって明かしている。

19世紀ロシア文学研究を専門とするものが、すぐれて専門的な異分野の書物をあえて書評する理由を述べておきたい。

1991年の9月末、ロシア共和国独立宣言の出た直後、「日ロ極東学術シンポジウム」の一員として私はコムソモーリスク・ナ・アムールにいた。同行の経済学者たちが、「民需転換」について現地の企業家たちを相手にコンサルタントとして相談にのるというのが同地訪問の主目的だった。原子力潜水艦を製造してきた軍需産業関係者から、レジャーボートやヨットを作って輸出したいのだがという相談さえあった。

前日はソールニチヌィ鉱山を見学した。鉱山は山間部の奥深くに、果てしないほど広大なコバルト色の人造湖を有していた。十分選鉱しきれなかった鉱石の残骸を、将来の技術革新に期待して貯めているのだという。ついで極東ロシア最大の石油精製工場も見学した。創業以来何十年も基本装置の更新がなされておらず、資本主義国に比べ精製能力がか

* 塩川伸明『国家の解体 ペレストロイカとソ連の最期 I, II, III』東京大学出版会、2021年。

DOI : 10.14943/jbr.12.165

なり劣っていることを明かしてくれた。だが自ら「トルカーチ(押し屋)」だと明かしたその説明員は、全ての難問は中央との駆け引きで解決してきたという。またこの企業は地元の病院と保育園を経営し運営費を負担していると、これも誇らしげに語った。ほかにも、ジューキミシンがずらりと並んだ大きな縫製工場もあって、ファッション・ショーを見せてもらった。工場長は、どんな注文でもやりこなせる、現に日本から「キマノー」の注文も受けていると言って、仕上がったミシン仕立ての化繊の着物を掲げてみせた。日曜日に市場でファッションモデルさんを見かけた。この工場の工員さんだった。

この光景はソ連崩壊のわずか3ヶ月前のことである。ソ連最後の日常生活をいまでも克明に記憶している。一文学者としては、ペレストロイカの激動のなか、なおも根強く残るソ連的日常の裏で、あるいは根底においてどんな危機が、どのようなプロセスを踏んで進行していたのか、どうしても明らかにせずにはおれない。だがそのための手がかりは得られないまま、時はただ過ぎ去るのみだった。

それから30年、この研究書が満を持して登場したのである。研究対象となった歴史的「事件」を戯曲にたとえるなら、主役がゴルバチョフ、ミハイル・セルゲーエヴィチとエリツィン、ボリス・ニコラエヴィチの二人であることは疑いない。一方の立役者であるゴルバチョフは終幕直前の辞任演説の場面で、「一九八五年に、国は危機的状態にあり、部分的改革では済まないことは明らかだった」(2236頁)というセリフを吐いている。だがこの「危機的状態」が具体的に何を意味するのかは、必ずしもはっきりしない。後に見るように、第一幕からすでに、何人かのアクターたちは「このままではソ連は崩壊する」と声を上げている。それではその「危機」はどんな構造をもったものであったのだろうか。その当時ソ連から届くペレストロイカ関連ニュースの中心を占めていたのは、言論の自由、民主主義とならんで市場制導入にともなう経済改革問題であった。研究の立ち位置を連邦制と民族問題に定めた塩川は、経済問題にまで論を広げることには慎重である。それでも、「経済改革と連邦制改革は異なる次元の問題であり<・・・>本書では経済問題への深入りは基本的に避けているが、この時期(一九九〇年—T.K.)には二つの論点が重なり合うようになった以上、この局面を視野から外すことはできない」(833頁)として、833頁から852頁にかけて経済的側面の歴史プロセスを記述している。だが明らかにソ連崩壊の引き金のひとつであったソ連経済の行き詰まりとちぐはぐな打開策の問題は、連邦制や民族問題との有機的連関において十全に照射されているとは言い難い。

言葉を扱う専門家としてあえて触れておかねばならない問題がひとつある。

「解体」という語は元になる動詞があり、それが体言化されて出来上がったものである。そうだとすれば本書の題名にある「解体」の元になる動詞は、他動詞の「解体する」であろう。記憶する限り、たしかに同時代のソ連国民の多くはゴルバチョフを「ソ連を打ち壊した張本人」だと非難していた。この見方は「解体」を、まぎれもなく他動詞派生的な意味

でとらえているといえるだろう。しかし一方ゴルバチョフ本人は、「解体」方向に働く強圧に抗しきれなかったのだと弁明していたと思う。そうならば他動詞的な「解体」ではなく自動詞起源の語義を含意していることになる。その場合はむしろ「崩壊」とするのが妥当ではないだろうか。

「ベロヴェジャ協定」という大団円の場面での、もう一人の主演であるエリツィンが演じた役割も、同じく二つの解釈が成り立ちそうに思える。本書には英文の題名も併記されていて、当該の語は“Disintegration”となっている。複数の英和辞典に当たってみたところ、多くは「崩壊、分裂、分散」といった自動詞的な訳語が与えられている。だが中には「解体」という他動詞系の訳語を添えているもの、「分解」のようにどちらともとれる語義のものもある。原義を確かめるため手元にある英英辞典をひいてみると、“**disintegrate** *v* <...> to break up into small pieces <...> -gration *n*”⁽¹⁾となっている。そこで複数の英和辞典で“break up”の語義を調べてみると、たいがい自動詞の用例が先に来て、他動詞の用例はそのあとに続く。ロシア語では「распад」という語が定着している。これは「распасться」から派生した名詞なので、もっぱら自動詞的な意味合いで用いられているといえるだろう。では実際にソ連においた生じた現象は一体どちらだったのだろうか。この書評では塩川が提供してくれた情報を手がかりにこの問題も考察したい。

1. 国家としての特異性

ソビエト社会主義共和国連邦は、世界一広大な領土に文化、歴史、宗教、言語において出自の異なる100を超えるエスニック単位を抱えた国家であった。だが彼らは「советский народ」という「単一の国民」として、15の共和国に分かれて共生していた。まさに地球上他に類を見ない国家であったといえよう。各共和国の領土内にはたいがい、基幹民族の他にも別の諸民族が様々な比率で混じり合って暮らしていた。また多くの共和国内にはさらに、民族的諸権利において細かく差別化された、相対的に少数の民族たちで構成される自治共和国、自治州、自治管区(これらにも別の民族が共存していた)などもあった。しかもそれらすべてが、「諸民族友好」という美名のもと「一体化」した存在とみなされていた。もしこの国家形態がそれなりに合理的なものであったなら、「解体」にせよ「崩壊」にせよ、結果しなかったはずだ。だがそれは起きてしまった。つまりこの国家形態自体が根源的脆弱性を帯びていたのだ。

もしペレストロイカ以後ソ連崩壊までの7年間、かまびすしく展開された議論において合意が成立していたものがあるとすれば、それはソ連という「連邦」が、きわめて特異な、地上他に類を見ない「国家的まとまり」であったという共通認識であろう。

この間のすべての出来事を、通時的軸と共時的軸において同時に把握することはとうて

(1) Longman Dictionary of Contemporary ENGLISH, New Edition (Harlow: Longman, 1988), p. 293.

い出来ない。著者はこの難問を解決するために、考察対象の抱えている問題の性質が地域性を帯びていることに着目してグループ化し、さらにそれを「共時的」と見なしてよい程度のスパンにカットしたうえで、横並びにして比較するという「妙手」を採用している。第I巻の第一部(ペレストロイカの開始と展開)において第一章の「初期の民族問題」につづき、第二章から第八章まで、バルト三国、中央アジア、ハイアスタン(アルメニア)およびアゼルバイジャン、サカルトヴェロ(グルジア/ジョージア)、モルドヴァ(モルダヴィア)、ウクライナとベラルーシ(白ロシア)、そしてロシア共和国を各章に割り当て、そこで生じた政治的出来事を、アーカイヴ資料を存分に駆使して記述している。第I巻が切り取ったスパンが1985年から1989年末までとかなり長いのは、第II巻や第III巻に比べ、相対的に動きが緩慢だったからであろう。第II巻が扱うのは1989年12月からクーデタが起こった1991年8月まで、そして最終第III巻は、モルドヴァ(モルダヴィア)とウクライナおよびベラルーシ(白ロシア)、中央アジアについてはふたたび1990年の初め頃にまでさかのぼって政治過程を追い、第一八章(八月政変)、第一九章(過渡期)、第二〇章(ソ連国家の最期)へと、一気に記述を加速化させている。

著者は上記の地域的括りを並列してとらえず三次元に構造化して、Aソ連中央、その一段下にB独立派共和国、Cロシア共和国、Dその他の共和国を並列させ、またB,C,Dのそれぞれの内部の自治共和国や自治州をE', E, E''として並列させた「三階建て」の全体構図を図1として示す(6、800頁)。A,B,C,DおよびE', E, E''の各パーツ内部や相互間で生じた多種多様な軋轢、衝突、事件、抗争、離合集散等々の具体的差異を捨象すれば、たしかにこういう構図に納まるであろう。夾雑物を取り除いて「国家崩壊」へのプロセスを捉えるためには、この図はまことによくできていると思う。

2. 内在していた脆弱性

この図1を別の視点から見直すと、もう一つ浮かび上がってくるものがある。それはソ連の内部で生じる力学的関係も同時に示す「構造図」だということである。「E'—B—A」というラインは、三者間で「綱引き」をしている関係を現していると見ることができる。綱の引き合いはその時々で強弱や方向が一定しないが、それらの力は一定期間累積されて行くわけで、結局上下方向への構造的力として作用することになる。これとは別に「E—C—A」、「E''—D—A」という綱引き線もある。そうなるとA、すなわちソ連中央は、三方向から加えられる力を一手に受け、これに対抗して応力を発揮しなければならない。これはきわめて危険を孕んだ構造というべきであろう。地球を覆うプレートになぞらえるなら、Aは三方向から集中的に加えられる地殻変動のような破壊力を受け止めねばならないことになる。見方を変えれば、このAからのびる三本の線は構造的に脆弱な破断線となる可能性を暗示しているのではないだろうか。

ロシア共和国共産党政治局が、エリツィンは「ソ連を解体に導いている」と弾劾したのは、1991年1月18日のことである(1018頁)。したがって「ソ連解体」について本書に登場するアクターたちが言及したのは、「八月政変」の半年以上前なのである。一方ゴルバチョフが「迫り来る破局」について語り、「改革路線の枠内で破局を食い止めなければならない」と訴えたのは、同年4月9日の連邦評議会で行なわれた「長大な演説」においてであった(938頁)。この時のゴルバチョフの頭にあったのは「連邦制の危機」、「経済崩壊の危機」、「権力機関麻痺の危機」というまさに「多臓器不全」的危機であった(937頁)。だがこの時点での彼が「ソ連解体」が不可避だと確信していたとまではいえないだろう。

他方これよりかなり前の1990年11月1日、経済関係の重要事項について、ロシア共和国法がソ連法に対して優位に立つとする法律の審議において、バブーリンは「ソ連はもはや存在していない」という前提のもとで発言している(1095頁)。この頃ともなればソ連政府やロシア共和国連邦の実務に与る人々の中に、ソ連の「余命」を予測するものがいたのは当然であろう。ただ経済的諸要因がどれほど強力だったとしても、即政治的優位性を得るわけではない。政治として結果するためには別の何かが必要であり、国家の「解体」や「崩壊」を論ずるには、そのメカニズムを解明しなければならないと思われる。

ロシア所有法が1990年12月24日に最高会議(ロシア共和国の — T.K.)で採択された。この審議において法学者のクラシヴィリは反対の立場から批判し、「この法律は社会主義を終わらせるものだ。[...]ソ連所有法の適用の排除は連邦国家としてのソ連を弱め、その解体に導くものだ」(1104頁)と述べたという。こちらはまだソ連邦が延命できるものと考えていたのであろう。

他の共和国でもおなじころ、同様の認識が広まっていた。例えば1990年11月、テル＝ペトロシヤンは第二回アルメニア全民族運動大会において、「七〇年間アルメニアの存続を保障してきたソ連でさえも、もはや崩壊に瀕しており、保障者たりえない」(1513頁)と語った。彼はまた1991年2月28日に「ソ連の解体は遅かれ早かれ不可避だ」(1515頁)と発言していたという。アルメニアではこの頃最高会議の新聞に「ソ連は既に事実上崩壊している」と書いた論文さえ掲載されたという。もちろんまだソ連の国家機関は存在していた。各共和国がこぞってソ連から共和国への対応機関への移管を求めていたKGBやソ連軍、内務省など、所謂「暴力装置」の解体はまだ実現していなかった。したがって「死に体」ではあっても「死体」になっていたとはいえない。

経済改革の進行は、ロシアにも「実業界」なるものを登場させた。著者はこれを「新興ブルジョアジー」と呼ぶ。彼らは積極的に「クーデタ非難＝ロシア政府支持の姿勢を明確にして」いたという(1883頁)。このことから類推するかぎり、経済改革は「破綻」、「行詰り」の局面ばかりでなく、成功の「萌芽」も見せていたのであろう。読者としてどうしても知りたいのは、分けられた地域ごとの経済状況の刻々の変化と、それが当該地域の政治過程に

及ぼしたにちがいない影響についてである。第II巻以降には、さすがに市場経済への移行にまつわる諸事件がひんぱんに記述されるようになるが、それと政治過程の絡み合いは、「ソ連解体プロセス」の本筋において分析することがあえて控えられているとの印象が残る。多くの共和国がともに目指したはずの「単一自由経済空間」は、結局成立しなかったと思われるが、それはソ連の「解体」あるいは「崩壊」とどのような関係にあったのか、またなぜそれはそのようになったのか、読者としてはどうしても知りたいところである。

3. 廃墟にだって人は生きる

「八月政変」はすべての共和国指導者たちをすっかり覚醒させ、本音をむき出しにするようになった。第III巻の後半からは、露骨なエゴのぶつかり合いが余すところなく暴露されている。エリツィンは1991年10月28日の国民への呼びかけの中で、「ロシアは他の共和国に原料を安価に提供している。その原料で加工したものをロシアが買うときは高い価格になっていて、ロシアが損をしている」(2041頁)と言っている。ソ連崩壊が現実味を帯び始めると、カザフスタンのナザルバーエフもウズベキスタンのカリーモフも、それぞれの立場からの利害を露骨に口に始める。もはや誰の言説が正しいか、検証する場そのものが消滅していた。まさに末期症状である。

ロシアとウクライナは国家間に対立の種をいくつも抱えているのに、「同床異夢」を見る関係になっていた。これにベラルーシを加え、スラブ系三国同盟が成立した。著者はロシア政権が「ソ連解体論に踏み切っていた」時期を「ウクライナ・レファレンダム」直後(1991年12月1日—T.K.)だったと推定している(2173頁)。12月7日夜、ベラルーシのペロヴェジャ森の別荘にスラブ系三共和国の首脳が集まった。そこでエリツィンが「ソ連解体という結論を出した」(2178頁)。

ここで「ソ連国家の消滅宣言」の正当性をどのようにして担保するかという、問題があらたに浮上する。詳細な経緯紹介は割愛するが、ゴルバチョフに「引導を渡す」役割の分担者として選ばれたのがシャーポニコフ・ソ連軍国防大臣であったというのは、まことに象徴的である。つまり「死に体」になっていたはずのソ連軍の最高責任者が「死体検分」に立ち会わされたようなものなのだからだ。このあと生じた一連の事態に対してあれこれ責任逃れをするアクターたちが登場する。代表的なのはエリツィンの副官であったブルブリスによる弁明を補足したシャフライである。彼は「ペロヴェジャ会議の当事者たちはソ連を解体したり清算したのではなく、存在しなくなっているという事実を確認しただけだと説明した」(2194頁)と言い切る。

そこまで読み進めるうちにふと、ソ連崩壊の3年前に亡くなった母の死亡診断書を思い出した。死因の大半は肺炎か腎不全だと知ったのはその時である。診断書にはそれに至る直近の病因が記載され、やがて心当たりのある脳内出血に至った。実はそれにも別の原因

があり、問い詰めて行けばきりが無い。国家の「解体」や「崩壊」もこれと同じで、複雑な諸要因の連鎖によって引き起こされるものである。直近の原因を解明したところで、実は何も語らぬに等しい。だが著者はもちろん承知の上で、各地における最終局面の記述をもって擱筆している。死亡診断書が遡及的に記述するのに対し、歴史記述は時間方向が逆向きである以上、いたしかたない。

プーシキン生誕200年記念の国際会議のあった1999年夏、私はオデッサにいた。海岸で美女の腰に腕を回した、いかにもマフィア然としたマッチョな男と一緒に飲もうと誘われた。ソ連時代はウラルの鉱山技師だったという。ソ連崩壊の「お陰で」彼は「合法的に」莫大な富を手に入れたと自慢していた。その後も旧ソ連のあちこちを訪れ、あれこれ手立てを探りながら生きる人々に出会った。その都度思い返されたのは、「ソ連って、一体何だったのだ」という思いであった。

かなりの数にのぼるソ連の作家たちが、それぞれが属する共和国で、積極的に政治活動に加わったり発言したりしているのを本書で知った。19世紀半ばにレフ・トルストイは、ナポレオンによるロシアへの軍事侵略という国家的大事件を、半世紀を経てようやく「роман-эпопея」、すなわち歴史叙事詩的長編小説のかたちで『戦争と平和』において歴史の文学的形象化を実現した。1928年から40年までの10数年をかけて、ミハイル・ショーロホフは第一次世界大戦、十月革命そして国内戦という激動の時期を、長編小説『静かなドン』（「静かな」と訳される «тихий» は「ゆったりとした、滔々とした」という意味をもつドン河の枕詞—Т.К.）で、やはりコサックに特化した物語史を完成させた。「ソ連解体」、「ソ連崩壊」はそれらをはるかに凌駕する国家的大事件であったにちがいない。

人名索引を見ると、アイトマートフ、ザルイギン、ソルジェニーツィン、ブイコフ（ブイカウ）、ラスプーチンなどの名が目にとまる。だが彼らの手になる文学的歴史総括の作品は残念ながら今日まで日の目を見ていない。もしかしたらそれは彼らの多くが母語との関係で、ナショナリズムの呪縛から逃れられないことが多かったことと関係しているかも知れない。ただこの問題に取り組むべきは私たちロシア文学者であり、ロシア史家に押しつけてはならないだろう。

